

授業改善プランに照らして「策定までに踏むべき手順」を再点検（各2点×7項目）

改善プランに記述されていない背景／経緯も含めてチェックしてみましょう。

1. 改善プランを策定する前に、優良実践からの学び

(ア) 学習効果のボトルネックを見つけただけでは、有効な改善プランは立てられない。

(イ) 既に自分の発想できる範囲で最善と思われる教え方・学ばせ方をしていたはず。

(ウ) 現時点での知見・発想だけでは、有効な改善策が思い浮かばない可能性が高い。

改善すべき項目で高い評価を得ている授業を実際に参観したか。 ( 点)

これまでの改善行動の成果についても点検し、効果を上げた理由を特定したか。 ( 点)

2. 参観から得た気づきを持ち寄り、授業改善行動の教科としての方針を固める

(ア) 同じものを見ても気づくポイントは違うので、互いの気づきを交換する機会が必要。

(イ) 共通した方針のもとで、それぞれが最善と思える方法で実践してみることで、  
より多くの知見が得られるし、やり方による効果の違いも探れる。

(ウ) 教科としての改善方針を決めたら、こだわって実施することが大切。(作戦ミス vs 実行ミス)

参観で得た気づきを交換する場を持てたか。 ( 点)

教科としてこだわっていく改善方針を確認したか。 ( 点)

3. 改善プランを具体的な授業実施計画に落とし込む

(ア) 50分の流れのどこに組み込み、どうやって従来からの方法との適合性を高めるか。

(イ) 足し算だけで授業を改善しようとするやと枠（生徒の負担、授業時間）に収まらない。

(ウ) 教科で共有したこだわりを優先して、必要性の低い学習活動は授業内での扱いを見直す。

新たな取り組みを50分の枠に収めた授業構成を具体的にイメージしたか。 ( 点)

4. 中間検証の機会を設けて、小さなPDCAサイクルを作る

(ア) 次の授業評価アンケートの結果を待たずに、中間検証を行った方が改善は確実に  
最終的な結果は達成／未達成の2値。途中での修正が改善目標の達成可能性を高める。

(イ) 中途での成果を互いに共有できれば、さらに効果的な手法に思いが至ることも

中間検証をどのように行うか、計画されているか。 ( 点)

中途までの成果を教科で共有する機会をどこで設けるか検討したか。 ( 点)